東ティモールの独立派と併合派

圧倒的多数で独立を選択した住民投票後、併合派民兵による破壊活動が続いていた東ティモールで９月20日、オーストラリア部隊を主体にする多国籍軍（ＩＮＴＥＲＦＥＴ）が活動を開始した。しかし、これで東ティモールのインドネシアからの独立プロセスが軌道に乗ると楽観はできない。そのプロセスの進展は、インドネシア政府・国軍という要因に負うところが大きいものの、東ティモール人の政治指導者たちが真の意味での和解を達成することも不可欠な要因だからだ。そこで東ティモール関連人脈（独立派・併合派）を概観する。

【独立派】東ティモール民族解放軍（Ｆａｌｉｎｔｉｌ）ら独立派の現地、及び海外の諸組織を包括する「マウベレ民族抵抗評議会」（ＣＮＲＭ、注）が、Ｆａｌｉｎｔｉｌ司令官で独立派の実質的な最高指導者でもあるシャナナ・グスマン氏（人物データ・ファイル参照：以下《ｐ》）の呼びかけで設立されたのは1988年だった。インドネシアによる抑圧政策と闘い、民族自決権に基づき東ティモールの独立を勝ち取ることがその目的なのはいうまでもない。

ＣＮＲＭはスハルト政権が崩壊する１カ月前の98年４月、ポルトガルに集まった200名の独立運動指導者により「東ティモール民族抵抗評議会」（ＣＮＲＴ：Conselho Nacional da Resistencia Timorense）として改編された。グスマン氏はこの間の92年11月にインドネシア国軍に反乱罪容疑で逮捕され、当時は獄中にあった（先月９日釈放）が、圧倒的支持でＣＮＲＴ議長に再選されている。副議長には、（東ティモールの精神的指導者カルロス・ベロ司教《ｐ》とともに）96年にノーベル平和賞を受賞しているラモス・ホルタ氏《ｐ》が就任した。ＣＮＲＴは現在の独立派を代表する包括的政治機構となっている。

【併合派】インドネシア併合支持派の政治指導者や様々な民兵組織《ｐ》は従来支配側であったこともあり、統括組織と呼べるようなものは存在していなかった。各組織がインドネシア政府や国軍と直結してきたのだ。しかし、住民投票が近付いていた今年４月、インドネシア政府の東ティモール担当特使を務めるロペス・ダクルス氏《ｐ》が呼びかけて併合派の横断政治組織「東ティモール自治統一戦線」（ＵＮＩＦ）を結成した。また、民兵組織「ハリリンタル」のジョアン・タバレス司令官《ｐ》が併合派武装勢力を統括する「東ティモール併合防衛部隊」の司令官、「アイタラク」のエリコ・グテレス司令官が同部隊副司令官ということになっている。ただ、指揮系統が確立している様子はない。

独立、併合両派の和解を目指す協議委員会が、住民投票の翌日の８月31日に、独立派からグスマン氏ら10人、併合派からはダクルス氏ら10人、それに国連などが推薦する５人の計25人（ベロ司教ら２人が名誉顧問）で発足したが、現在は空中分解状態になっている。

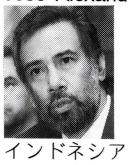
（注）「マウベレ」は、ポルトガル植民地時代に東ティモールの貧しい農民を表す蔑称だった。独立運動指導者は東ティモール人の代名詞として「マウベレ民族」を用い、農民との連帯を強調した。

〔人物データ・ファイル〕

東ティモール関連人脈

《独立派指導者》

■シャナナ・グスマン
Jose Alexandre "Xanana" Gusmao



インドネシアによる併合に反対する闘争に半生を投じ、独立派住民の心の支えとなってきた東ティモール独立運動の実質上の最高指導者。1975年のインドネシアの侵攻以来、東ティモールの山間部を拠点にインドネシア駐留軍に対する武装抵抗活動を行ってきた東ティモール民族解放軍（ファリンティル：Falintil）の司令官でもある。東ティモールでは「日の出ずるティモールから輝く光」と同氏を礼賛する歌があるほどで、特に中心都市ディリでは「シャナナを知らないものはいない」（同歌の一節）。今年８月30日の住民投票の結果が９月４日発表され、独立派の圧勝がわかった瞬間、軟禁中のジャカルタでＶサインを掲げ「独立は全世界の勝利だ」と宣言した。

76年にインドネシアが東ティモールを併合した後、インドネシア国軍によるゲリラ殲滅作戦で、東ティモール独立革命戦線（フレティリン）の軍事組織ファリンティルは一時壊滅状況に陥った。81年に司令官に就任して以来、東ティモール住民を独立へと団結させるための「民族統一政策（Policy of National Unity）」を掲げ、80年代を通じて同組織を再建したのが同氏だ（現在でも「ゲリラ戦士」を自称する）。

92年11月にインドネシア国軍に反乱罪容疑で逮捕され、当初はスハルト政権により終身刑の判決を受けた（後に禁固20年に減刑された）。しかし、世界各国の指導者たちがジャカルタ訪問の折に収監中の同氏との面会をインドネシア政府に要請。特に、97年７月のマンデラ・南アフリカ大統領（当時）との会見は、東ティモール問題を国際的に再提起する契機となった。また、98年５月にスハルト政権が崩壊する直前には、国連事務総長特使が３回にわたって刑務所に同氏を訪問している。その間、独立派の新しい連合組織・東ティモール民族抵抗評議会（CNTR）の議長に（獄中にいながら）選出されている。

98年５月にスハルト政権崩壊で成立したハビビ政権が、独立容認政策を打ち出したことに伴い、今年２月、刑務所からジャカルタの民家での軟禁に待遇改善され、住民投票後の９月７日約７年ぶりに釈放された。その直前から、東ティモールでは、住民投票での独立派圧勝に反発する併合派民兵が、独立派への武力攻撃を強めディリを事実上制圧したが、同氏は独立派には反撃への自制を求め続けている。

将来、独立が実現すれば、東ティモールの初代大統領就任が期待されているが、自らは「助言者」になるだけと言い、大統領にはマリオ・カラスカラン前東ティモール州知事を推薦している。ただ、「私は適任ではないが、すべては住民の意思次第だ」との発言には国家指導者就任への含みも持たせている。住民投票前に発表した独立後の東ティモール建国の構想では、新国家像として市場経済の擁護や、雇用創出のための経済特区の創設などを提唱した。

▼データ
【現職】東ティモール民族抵抗評議会(CNTR)議長
東ティモール民族解放軍(ファリンティル：Falintil)司令官
【年齢】53歳(1946年6月20日生まれ)
【生地】東ティモール・マナトゥトのラレイア
【学歴】豪州の大学で学ぶ
【経歴】(大学卒業後)ディリの地元紙記者
1974：(新聞社を退社)東ティモール独立革命戦線(フレティリン：Fretilin)に参加
1978：(前任者ニコラウ・ロバト：Nicolau Lobatoの死去に伴い)フレティリン議長に就任
1981：フレティリンの軍事部門・東ティモール民族解放軍(ファリンティル：Falintil)司令官に就任
1988：マウベレ民族抵抗評議会(CNRM)を創設
1992：[11月]反乱罪容疑でスハルト政権に逮捕される
終身刑を受け、ジャカルタのチピナン刑務所に収容される
後に、禁固20年に減刑
1998：[4月]独立派の連合組織・東ティモール民族抵抗評議会(CNRT、マウベレ民族抵抗評議会CNRMが改組)議長に選出される
1999：[1月]インドネシア政府が独立容認を打ち出した直後、軟禁に待遇改善される
[9月7日]釈放
【家族】妻と子供2人(オーストラリアのメルボルンに在住)
【横顔】
・邦字文献では、姓についてはグスマオ、又はグスマォンという表記もある。
・6人兄弟。父マヌエル氏(82)は、住民投票の結果発表後の併合派によるディリの武力「制圧」下でグスマン氏に対する報復として殺害されたとの情報があるが確認されていない。グスマン親子が面会したのは92年の逮捕までに東ティモールで2回、その後ジャカルタで2回のみだった。グスマン氏は「釈放されたら東ティモール入りし、両親に会う」ことを願ってきた。
・マヌエル氏が住民投票前に共同通信に語ったところによれば、「息子は腕白な子供だったが、読書や詩を作るのが好きで物静かな一面もあった」。74年にポルトガルが植民地政策を放棄した後、家族が段階的な独立を唱える政党を支持する中「息子だけは即時独立を唱えるフレティリンを支持した」。「信じることは親が何と言おうとも決して曲げない子だった」。
・地元紙の記者をしていた75年12月にインドネシア国軍が侵入。「西部ボボナロ県で侵攻の様子を8ミリ撮影すると言って家を出たまま、山に入った」。着替えのシャツとズボンを2枚ずつ持っただけだった(マヌエル氏が共同通信に)。
・記者会見などでは、端正な顔を崩さずに突然冗談を言うひょうきんさがある。また、「おれはゲリラ兵士なんだ」が口癖。時折、自らの考えがまとまらないと、苛立ちを発散させるように銃を構えるポーズを取る。
・サッカー好きで、刑務所に収容されていた時も持ち前の指導力を発揮して、囚人サッカーチームのキャプテンをしていた。
・日本への期待：「日本が派遣する文民警察官が3人だけ、との報道に驚いている。だが(中略)日本に人的、財政的な支援と協力を最大限してもらえると信じている」(中日新聞6月1日付のインタビュー)

■ジョゼ・ラモス・ホルタ
Jose Ramos Horta

東ティモール独立派の長年にわたる「海外スポークスマン」的存在。96年に東ティモールの精神的指導者ベロ司教とともにノーベル平和賞を受賞、東ティモール問題を国際社会に再認識させた。
新聞記者を経て、東ティモール独立革命戦線(フレティリン)に創設から参加。75年11月、同戦線が独立を宣言した直後の暫定政府で外相に任命され、その海外代表として東ティモールを出た(インドネシア国軍が侵攻する3日前)。ポルトガルに亡命した後、フレティリン国連代表となり、国連総会や欧州議会などでインドネシア国軍の撤退など独立への支援を訴えてきた。こうした同氏の活動は、フレティリンの一部幹部のマルキスト指向に反対してきたライバル組織のティモール民主同盟(UDT)からも次第に認められるようになった。88年、マウベレ民族抵抗評議会(CNRM)の設立と同時にフレティリンを離れ、同評議会の海外特別代表に(98年にCNRMが東ティモール民族抵抗評議会〔CNRT〕として改組された時にはその副議長に就任)。1994年10月には、国連主導の対話の一環としてインドネシアのアリ・アラタス外相と会見した。近年はシドニーを拠点に、世界各地で外交活動を展開している。
独立派最高指導者のシャナナ・グスマン氏を尊敬し、頻繁に連絡を取り合ってきた(同氏は「グスマン氏が本来ならノーベル平和賞を受賞すべきだった」と語っている)。また、同賞受賞者であるアウン・サン・スー・チー女史(ミャンマー)やダライ・ラマ師(チベット)とも「同志的」な関係を保っている。しかし、海外生活が長いため、国際社会での知名度の割には東ティモール住民に対しての影響力は低い。今年6月、ポルトガルへの亡命以来24年ぶりにインドネシアの地を踏んだ。

▼データ
【現職】東ティモール民族抵抗評議会(CNTR)副議長
【年齢】49歳(1949年12月26日生まれ)
【生地】東ティモール・ディリ
【学歴】ソイバダ村のカソリック宣教施設で学ぶ
1983：オランダ The Hague Academy of International Law で学ぶ
1984：(トルコ)アンティオキア大学から修士号(平和研究)取得
【経歴】
1969：放送(ラジオ、及びテレビ)記者(－74)
1970：(ポルトガル政庁により)モザンビークに「派遣」
1974：東ティモール独立革命戦線(フレティリン)設立に参加
1975：[11月]「東ティモール人民共和国」暫定政府外務・情報相
(インドネシアの武力介入直前)東ティモールを出る
1976：フレティリン国連代表(在ニューヨーク)(－89)
1988：マウベレ民族抵抗評議会(CNRM)の設立と同時にフレティリンを離れる
1996：(ベロ司教とともに)ノーベル平和賞を受賞
1998：[4月]東ティモール民族抵抗評議会(CNRT)副議長
【横顔】
・ポルトガル人の父と、ティモール人の母との間に生まれた。ポルトガル国籍。11人の兄弟姉妹の内、4人はインドネシア国軍によって殺害された。それもあり、旧スハルト政権に対する憤りはすさまじい。最近スハルト大統領が軽い脳卒中で入院した時には、「彼が地獄の業火で焼かれることを望む」と言い放っている。
・ホルタ家は生地から「追放」される歴史を持っている。祖父はポルトガルからアゾレス諸島に追放になった。同氏自身も1970－71年にポルトガル植民地当局の手でモザンビークに「派遣」されている。
・95年11月、大阪でのアジア太平洋経済協力会議(APEC)開催に合わせて来日し、グスマン氏の釈放などを国際世論に訴えた。
・ノーベル平和賞の受賞に際して、インドネシア政府はオスロ委員会は客観性を欠いていると非難し、インドネシアの地元紙も社説で同氏が「犯罪者」であるとともに、「混血のオポチュニスト」などと論評した。
・シドニーのニュー・サウス・ウェールズ大学法学部内に平和学や人権問題を研究する外交修練ゼミを開設している。

■カルロス・フェリペ・シメネス・ベロ司教
Bishop Carlos Felipe Ximenes Belo

1996年、ラモス・ホルタ氏とともにノーベル平和賞を受賞した東ティモールのカソリック最高指導者。人口約80万人の9割がカトリック教徒という同地で、生活問題から政治問題まで住民の不満や苦情の受け皿役を務め、絶大な信頼を得て来た。ポルトガルのカトリック大学を卒業し、ローマの司教大学にも学んだ。88年にディリにある東ティモール・カトリック教会の最初の司教に任命されている。
81年にポルトガルでの留学から帰った後、インドネシア軍により多くの東ティモール人の命が失われていく状況に、キリスト教徒として非暴力の立場からインドネシア政府との対話、仲介に努力した。89年、デクエヤル国連事務総長(当時)に「我々は民族と国家の死に瀕している」として、住民投票の実現を求める書簡を送付し、インドネシア政府から激しい批判を浴びた。その一方で、同年には、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世の東ティモール訪問を実現させている。
インドネシア国軍が非武装の住民200人以上を虐殺した91年の「サンタクルス虐殺事件」の際は、自宅を多数のデモ参加者のために開放。それによって、多くの東ティモール人を殺戮や暴力から救ったことは、国際社会から高く評価された。
念願の住民投票は今年8月30日におこなわれたが、独立派の圧勝が発表された9月4日以降、反発した併合派民兵が各地で武力攻撃に出た。同司教のディリの自宅も6日に放火されたため、同司教は一時バウカウの国連事務所に避難した後、国連が用意した救援機でオーストリアのダーウィンに脱出している。

▼データ
【現職】東ティモール・カソリック教会司教
【年齢】51歳(1948年2月3日生まれ)
【生地】バウカウ(東ティモール東部にある第二の都市)
【学歴】ディリ神学校・高等神学校卒
1974：ポルトガルに留学(－79)
リスボン高等神学校、及びカトリック大学卒業
1979：(ローマ)サレジオ会司教大学で学ぶ
1980：リスボンで聖職に授任される
【経歴】
1981：ディリに戻る
ファツマカ・カレッジ校長
1983：ローマ法王庁より東ティモールの使徒座代表に任命される
1988：東ティモール・カトリック教会の最初の司教(Bishop of Lorium)に任命される
1996：(ラモス・ホルタ氏とともに)ノーベル平和賞を受賞
【横顔】
・父は同氏が2歳の時に死去。6人の兄弟姉妹。
・ノーベル平和賞受賞が決まった直後、ディリ郊外に建設されたキリスト像の完成式に参加したスハルト大統領(当時)と握手をかわしたが、当然のことながら同大統領からは「受賞祝いの言葉」は一切なかった。
・これまでに89、91、96年と3度、インドネシアの「治安当局」による同司教暗殺計画が発覚している。

■マリオ・ヴィエガス・カラスカラン
Mario Viegas Carrascalao

東ティモール最大のコーヒー・プランテーションの所有者であり、1974年に設立された、当初はポルトガルとの連邦(を通じて漸次的独立)を指向する政党だったティモール民主同盟(UDT)の初代党首でもある。併合後の82－92年の間、インドネシアの第27番目の州としての東ティモール州の知事を務めたが、その後はインドネシア国軍の残虐行為を強く非難する立場に転じた「旧併合派」。

東ティモール独立運動の最高指導者シャナナ・グスマン氏が、独立が達成された暁には東ティモール初代大統領の有力候補者として言及したことがある。しかし、併合派民兵組織「アイタラク」のエリコ・グテレス司令官は「シャナナ(グスマン氏)には敬意を表するが、カラスカランはもともと併合によっていい思いをしながら、(知事)ポストを失うや不満を言い出した『転向者』だ」として、憎悪感情を剥き出しにしている。

今年4月に兄マヌエル(Manuel Viegas)・カラスカラン氏の自宅が併合派の襲撃を受け、18歳の甥(兄の養子)が殺害された後、海外(マカオ)に避難した。常に暗殺の危険に晒されているため、東ティモールには民主化が達成されたら戻ると言ってきた。また、将来東ティモールの大統領になる意思はないが、駐ジャカルタ大使には是非なりたいとも語っている。

▼データ
【現職】独立運動指導者(前東ティモール州知事)
【年齢】62歳
【学歴】(ポルトガル)リスボン大学林学部卒業
【経歴】
1974：ティモール民主同盟(UDT)初代党首
1982：東ティモール州知事(－92)
(スハルト政権)最高諮問会議(DPA)メンバー
1999：[5月] 海外に避難
【横顔】
・邦字文献では姓についてカラスカラオ、カラスカラォンなどの表記がある。
・99年4月に自宅が併合派に襲撃された兄マヌエルは、元東ティモール州議会議員(ゴルカル)。弟のジョアン(Joao)は元来、ティモール民主同盟(UDT)の「独立派」であり、現在は東ティモール民族抵抗評議会(CNRT)のオーストラリア代表を努めている。

■タウル・マタン・ルアク
Taur Matan Ruak
【現職】東ティモール民族解放軍(Falintil)副司令官
【年齢】41歳
【横顔】24年間ジャングルで戦ってきた独立派のゲリラ指導者。インドネシア政府、国軍、インドネシア人が東ティモールに一人でもいる限り武器は置かないと宣言してきた。濃いブルーのベレーがトレードマーク。現在はポルトガルのリスボンに滞在中で、最近健康を害しているとの情報がある。

《併合派指導者》

■フランシスコ・ザヴィエル・ロペス・ダクルス
Fransisco Xavier Lopez da Cruz

スハルト政権時代の1993年からインドネシア政府東ティモール担当特使(巡回大使)を務める併合派の有力指導者。今年4月、併合派の横断組織・東ティモール自治統一戦線(UNIF)の結成に尽力した。

74年にティモール民主同盟(UDT)の創設に参加。即時独立派の東ティモール独立革命戦線(フレティリン)が75年11月28日に「東ティモール人民民主共和国」の独立を宣言すると、その2日後に UDT、ティモール人民民主主義協会(APODETI)など数組織がインドネシアへの併合を内容とする「バリボ宣言」に調印。同氏も調印者の一人となった。UDT 右派。

76年7月、インドネシアの第27番目の州として併合された東ティモールの副知事に就任。その後、国民協議会(MPR)議員や最高諮問会議メンバーにも選出された。同じく UDT の創設に参加したカラスカラン前東ティモール州知事が後年に独立派に転じたのとは対照的ともいえる。

▼データ
【現職】インドネシア政府東ティモール担当特使(巡回大使)
【年齢】57歳(1941年12月2日生まれ)
【生地】東ティモール・リキサのマウバラ
【学歴】(ディリ)ダレ初等・中等神学校
1964：(マカオ)上級神学校に留学
【経歴】
1967：ダレ神学校教員
のちに、(ディリ)ラハネ・カトリック学校教員
(モザンビーク)マプートの陸軍士官学校に学ぶ(2年間)
帰国後、軍事教練学校の教官
1973：(ディリ)ドゥアネで官吏として勤務
のちに、Avos de Timor(「ティモールの声」)新聞社社長
1974：ティモール民主同盟(UDT)の創設に参加
1975：[11月30日]「バリボ宣言」の調印者の一人となる
1976：東ティモール州副知事
1985：(スハルト政権)国務相の東ティモール開発専門委員に任命される
1987：国民協議会(MPR)議員
最高諮問会議(DPA)メンバー
1993：[4月] 東ティモール担当特使に任命される
1999：[4月] 東ティモール自治統一戦線(UNIF)の結成に尽力
【家族】
・セバスティアナ(Sebastiana Gusumao Alves de Olivera)夫人。ラハネ・カトリック学校教員時代に知り合う。子供4人。
【横顔】
・父フンベルト(Humberto Lopez da Cruz)と母リタ(Rita da Costa)はともに小学校の教師。9人兄弟の3番目(兄弟のうち2人がのちにフレティリンによって殺害されている)。兄弟が多かったため、家計が苦しく、小学校2年で退学を余儀なくされそうになったこともあった。幼少期には神父になりたいと希望していたので、初等・中等神学校で学んだ。
・ダレ神学校の教員の時の教え子の一人に、のちに東ティモールのカトリック最高指導者になったベロ司教がいる。(ダクルス氏も)聖職に就くために、ポルトガルで学ぶことを願っていたがかなわず、進路を変更しポルトガル陸軍に入隊を希望しモザンビークに赴く。

しかし、そこで上官から「東ティモールの人間はポルトガルとは関係ない」と言われショックを受けた。
・軍事教練学校の教官時代の生徒の中に、ラモス・ホルタ氏らのちに独立派指導者や東ティモール民族解放軍(Falintil)のゲリラになる人たちがいた。
・バスケットボールの選手としても将来を嘱望されるというスポーツマンの側面も。82年にはインドネシア全国体育委員会事務局に招聘されている。

《併合派民兵組織》

●ハリリンタル(稲妻)
Halilintar
【指導者】ジョアン・ダシルバ・タバレス(元ボボナロ県職員)
Joao da Silva Tavares
【拠点地域】マリアナ(Maliana：ディリの南西60km)

インドネシア国軍(TNI)は今年初め、タバレス氏を様々な併合派武装組織を統括する東ティモール併合防衛部隊の統括司令官に任命した(民兵組織は知られているものだけでも24組織あり、総兵力は7000と推定されている。民兵側の公称は3－5万)。しかし、構成組織がタバレス司令官のもとで統制がとられているかは疑問視されている。

同氏はリウライと呼ばれる東ティモールの伝統的首長の息子。今年3月には、ジャカルタで軟禁中だった独立派の最高指導者シャナナ・グスマンと会見し、和平について意見交換した。6月のインドネシア総選挙での与党・ゴルカル党の東ティモール比例リストに名が挙がっている(第17位)。

●アイタラク(棘)
Aitarak
【指導者】エリコ・グテレス(元「ガルダ・パクシ」幹部)
Eurico Barros Gomes Guterres

【拠点地域】ディリ(Dili)

結成されたのは、ハビビ政権が独立容認政策を打ち出してのち。ディリを拠点にしていることもあり、住民投票後に武力攻勢に出ている代表的な組織として海外マスコミでも報道されることが多い。「東ティモールを二分せよ」と主張。

グテレス氏(27)は1988年にスハルト大統領(当時)暗殺の謀議に関与したとして拘留されたことがある。また、タシ・トルで地下のギャンブル経営を取り仕切っているともいわれる。総選挙における与党・ゴルカル党の東ティモール比例リストでは第3位であることからも、民兵指導者の中ではインドネシア国軍が高く買っている人物(同氏がかつて所属していた「ガルダ・パクシ」は、1990年代初めにインドネシア陸軍の特殊部隊〔Kopassus〕が組織した「自警軍」で、現在の民兵指導者の多くは同組織の元メンバーである)。民兵組織を統括する東ティモール併合防衛部隊ではハリリンタルのタバレス司令官に次ぐ副司令官のポストにある。

マテウス・マリア(Mateus Malia)ディリ市長も「アイタラク」の幹部で、同市長は「民兵には約4万丁の武器がある」と豪語している(GAMMA 誌1999年9月5日号)。ベロ司教のディリの自宅を9月6日に攻撃したのもこの同組織である。

●ブシ・メラ・プティ（紅白の鉄）
Besi Merah Putih
【指導者】マニュエル・デソウザ（東ティモール州議会議員）
Manuel de Sousa
【拠点地域】リキサ（Liquica：ディリの西25km）

1998年12月27日設立。併合派民兵組織の中でもテロや脅迫行為を主体にする最強硬派。住民投票に前後して村民を強制連行・移動する活動を主に行って来た。今年４月にはリキサの教会を襲撃し、10人以上の住民を殺害している。これらの行為に参加するものには１日当り２万5000ルピアが支払われるといわれる。９月４日の投票結果発表後はディリにも侵入。

デソウザ氏は総選挙における与党・ゴルカル党の東ティモール比例リストでは第22位。

●マヒィディ
Mahidi
【指導者】カンシオ・デカルバリョ（元民事裁判所職員）
Cancio Lopes de Carvalho
【拠点地域】アイナロ（Ainaro：ディリの南50km）

1998年に結成された民兵組織。兵力は公称１万5000。一部情報筋によれば、インドネシア国軍が提供した自動重火器37梃を保有している。今年６月初旬、レオリマの村民が住民投票のための有権者登録に行くのを制止したり、８月下旬にはスアイに集結した2300人の難民への給水を妨害するなどの威嚇行為を行った。

独立派に同情的なオーストラリアを特に敵対視しており、同国の外交官やジャーナリストに対する「殺害指令」が出ている。住民投票前から、もし東ティモール住民が独立を選択した場合は内戦も辞さないと公言してきた。

●サカ
Saka
【指導者】ジョアニコ軍曹
Sgt. Joanico

【拠点地域】バウカウ県ライ・ソルライ（Lai-Sorulai）

インドネシア国軍が東ティモール民族解放軍（Falintil：シャナナ・グスマン司令官）に対する掃討作戦を展開していた1983年に結成された。今年３月にはインドネシアへの忠誠を誓う式典を行った。

●統一・民主主義・正義のためのフォーラム
Forum for Unity, Democracy and Justice

【指導者】バシリオ・アラウジョ
Basilio Araujo

併合派グループが対外交渉のために設立したスポークスマン的組織。

《インドネシア政府関係者》

■アリ・アラタス
Ali Alatas

スハルト政権時代の88年以来、外相職（4期目）にある。98年５月に成立したハビビ現政権でも、国際社会にインドネシアの外交政策の持続性をアピールするために現職に留任した。東ティモール問題では、1991年の「サンタクルス虐殺事件」での弁明など、国際社会に対してインドネシア政府の立場を説明してきた。しかし、閣内の「ハビビ派」とされながらも、今年１月のハビビ大統領による独立容認政策の「直観的」な決定では「カヤの外」だった感がある。

また、９月中旬の東ティモールへの多国籍部隊受け入れの決断も、ハビビ大統領とウィラント国軍司令官（国防・治安相兼任）の主導でなされ、同氏は決定を国際社会に伝えるスポークスマンのような役割を担わされている。ただ、多国籍部隊が派遣されれば、当然のことながらインドネシアの国益を守るための実質的な外交交渉や調整は同氏の肩にかかってくるのは間違いない。

▼データ
【現職】外相
【年齢】66歳（1932年11月４日生まれ）
【生地】ジャカルタ
【宗教】イスラム教
【学歴】
1954：外務省アカデミー（ADLN）卒
1956：インドネシア大学法学部卒
【経歴】国営 PIA 通信編集者
1954：外務省入省。国際経済関係局に勤務のち、駐タイ大使館勤務
1965：外務省情報文化局長
1966：駐米公使
1970：外務省情報・翻訳局長
1972：（アダム・マリク）外相首席秘書官（－75）
1976：ジュネーブ国際機関代表
1978：副大統領秘書官（－82）
1983：国連大使（－87）
1988：［３月］外相（第５次スハルト内閣）
1993：［３月］外相に再任（第６次スハルト内閣）
1998：［３月14日］外相に再任（第７次スハルト内閣）
［５月23日］外相（ハビビ改革開発内閣）
【趣味】少年時代から水泳とサッカーが好きだったが、今はサッカーは観戦だけで、ゴルフを楽しむ。推理小説、クラシック音楽も。
【家族】オランダ系のユニサ夫人と大学卒業と同時に結婚。同夫人との間に３女
【横顔】
・愛称：アレックス（Alex）。ジャカルタのアラブ系の名門家庭で、父親はインドネシア大学で生涯アラビア語の教師を務めた。６人兄弟の３番目。
・子供の頃から弁護士志望だったので、高等教育は外交官養成と法律の２つのコースで学んだ。短期間ジャーナリストとして勤務した後は、主として外務官僚として昇進し、外相にまで登りつめた。92年、インドネシアが非同盟諸国会議の議長国に選出されたのも、同氏の尽力による。外相としてその名を世界に知られるようになったのは、カンボジア和平交渉でキー・パースンとしての役割を果たしたことから。それもあり、一時国連事務総長候補に名があがったことも。
・94年５月、心臓発作で倒れ、心臓冠状動脈４本のバイパス手術を受けた。愛煙家。

■ザッキー・アンワル・マカリム少将
Maj.-Gen. Zacky Anwar Makarim

長らく東ティモール駐留部隊に勤務した経歴から、インドネシア国軍（TNI）内きっての東ティモール通とされる。1998年５月のスハルト政権崩壊後に過去の残虐行為の責を負って軍籍剥奪になったプラボウォ・スビアント元陸軍特殊部隊（Kopassus）司令官（元中将、スハルト前大統領の娘婿）に近く、同元中将とともに東ティモール、イリアンジャヤ、アチェなどの独立主義者掃討のための「秘密作戦」に関与してきた。

97年に国軍情報局長に就任。今年１月の国軍人事で国軍司令部付となり、ハビビ政権の東ティモール独立容認政策への転換に伴い、インドネシア政府の「東ティモール住民投票実行委員会」から派遣された現地連絡将校として、国軍司令部と国連東ティモール派遣団（UNAMET）との連絡・調整を担当した。しかし、一方で東ティモールを管轄下に置く第９軍管区のマヒディン・シンボロン参謀長（准将）とともに、併合派民兵組織の再編やその活動を「裏で指揮している」として国連関係者などから批判されてきた。８月中にはジャカルタの国軍司令部に戻っているようだ。

独立運動指導者のシャナナ・グスマン氏は、同少将は「古い敵だが、古い友人」（ファー・イースタン・エコノミック・レビュー誌９月２日号）でもあり、「友人」だから同少将の「すべての作戦は御見通しだ」（同）と皮肉っている。

▼データ
【現職】国軍司令部付参謀（東ティモール担当）
【年齢】51歳
【学歴】
1971：国軍士官学校（Akabri）卒業
【経歴】
1983：東ティモール駐留部隊勤務のち、同軍司令官（－89）
1997：国軍情報局長
1999：［１月］国軍司令部付
【横顔】
・ジャカルタの名家の生まれ。流暢な英語を話す。

■ムハマド・ヌール・ムイス大佐
Col. Muhamad Noer Muis

【現職】インドネシア国軍（TNI）東ティモール駐留部隊司令官

今年８月中旬に、イスラム教徒であるトノ・スラトマン大佐（Col. Tono Suratman）に替わり任命されたインドネシア国軍（TNI）の東ティモール駐留部隊（連隊）司令官。TNI が併合派民兵組織を背後で支援しているとの批判が国際社会から噴出する中で、ウィラント国軍司令官（国防治安相）がキリスト教徒を夫人に持つ同大佐に東ティモールの治安維持を託した。同大佐はオーストラリアで教練を受けたことがあり、イラクでの国連平和維持活動に参加した経験を持つ。着任直後に一部民兵が少数の武器を当局に差し出すなどの動きがあったが、実際にはこの司令官交替が何の効果ももたらさなかったことは住民投票後の民兵による無差別な武力攻撃を見ても明らか。

（アジア政治アナリスト　勝田 悟）